

坂口記念館で酒屋唄を聴く会 その壺

頸城杜氏の酒屋唄

演 唱 曲

総起～流し唄～桶洗い唄～数番唄～二番權～三コロ～酒屋数え唄

出演者紹介()内は現職の蔵名



池田宏司
(竹田酒造)



大竹啓治



小池 賢



鈴木 健
(福顔酒造)



高倉一郎
(山田商店)



高倉 繁
(長珍酒造)



長谷川和作



平田正行
(妙高酒造)



峯村栄一
(千代の光酒造)



箕輪弘之



宮嶋信市



柳沢明義
(滝澤酒造)



柳沢 久
(七笑酒造)



共演:バンベルガー・バウマンシャフト(Bamberger Baumannschaft)

平成 16 年 10 月 6 日 (水) 18 時開演 頸城村坂口記念館

企画:上越教育大学音楽学研究室

主催:頸城地域酒屋唄研究会

後援:頸城村,永谷音楽事務所(東京都)

1. 演唱曲解説

(1) 総起

早朝、一日の仕事始めに蔵人の起床を促す声。「オーイ オイツ」或いは「オーイ オイツ オイツ」と言う。始めは低く静かに始まり、次第にクレッシェンドしながら上昇する。

神道の警蹕とも共通する、唄の原点のような発声。

(2) 流し唄

地域によって「洗い場唄」とも呼ぶ。竹を細く割いて作った「シゴキ」(ササラ)で、酒造道具の櫂玉、麹蓋などを「半切り」と呼ぶ桶の中で洗う時、歌いながら洗う。早朝の作業で、冷たい水で手が麻痺するほど辛い作業であった。



(3) 桶洗い唄

早朝、六尺桶を洗う時の唄。桶の中に入り、湯を上から柄杓で掛けてシゴキ(ササラ)を上下・左右に動かしながら歌う。桶の木目に入り込んだ酒粕等の付着物を取り除く作業で、桶の木目に水で濡らしたシゴキがうまく合うと、ブーン、ブーンという弦楽器のような音がした。その音を伴奏に歌ったそうだが、良い音が出るまでには熟練を要した。シゴキの動きは唄のフレーズを決め、良い音が出ることは仕事の精度が高いことも意味しているので、歌い方によって杜氏は蔵人の仕事を評価したと言う。寺泊野積地域にはこの唄は伝承されていない。



(4) 数番唄

唄というよりも掛け声のような声であるが、蔵人はこれについても「唄」と呼んでいる。20番ひとわり(1組)で、「タメ」桶の数を勘定する唄である。水や湯、そして蒸米を量る時に、必ず唱えられた。歌詞の冒頭の言葉が数字を表している。

中越で使われることの多い4番目の歌詞「四谷赤坂麹町 たらたらたれるは御茶の水」は、バナナの叩き売りの歌詞でも聞くことができる。男性社会の蔵の中で担当する蔵人によって自由奔放に唱えられた即興的な唄でもある。



(5) 二番權

酒造り工程もだいぶ進んだところに歌われる唄である。2m以上もある長い櫂棒を持って、昔は桶の縁に立って歌った姿が、酒屋唄絵馬に記録されている。東海道、中仙道など、街道の宿場ごとに歌詞が作られ、「今日はどこそこの宿場まで」のような決め方をして、攪拌時間を計っていた。

(6) 三コロ

酒造行程も終わりに近づいた時に歌われる唄で、旋律的でリズムカルな唄である。歌う部分と、かけ声のような部分が交代して現れ、自由に奔放な歌詞が歌われる

(7) 酒屋数え唄

蔵人たちによって、の酒造りが終了した時の儀式「甑祝」とか、

宴会の席などで歌われた数え唄。当時の流行歌の旋律を引用して蔵の中の生活を歌っているが、具体的で良く分かる。蔵人によっては歌詞を自分で作って歌うこともある。



2. 酒屋唄と酒造り文化



酒屋唄は、「酒造り唄」とも言い、酒造工程に沿って蔵人が歌う唄です。歌う目的は、作業を円滑に進めるため、仕事の精度を高めるためなど、色々ありますが、蔵では蔵人(蔵で働く技術者たち)が酒屋唄を歌うことは必須条件で、「唄半給金」つまり給料の半分は唄のためといわれるほどでした。日本の酒造文化の始まりは上代にまで遡り、古事記にもすでに「酒」という言葉が登場します。ただ、その頃は濁酒が中心で、清酒が作られるようになったのは室町時代からと言われます。新潟県の頸城杜氏の歴史を中頸城郡『吉川町史資料集 酒造』(1994)で見ると、最も古い資料は寛永19(1642)

年5月で、在野の酒造り禁止に関する触書が残され、触書を破ったものから酒造道具を取り上げることも記されています。当時の酒造工程や使用道具は現在の工程とかなりの共通点があります。清酒の製造が始まったころに歌われ始めたとするならば、酒屋唄は室町から江戸にかけて歌い始められたのかもしれませんが。

現在の酒屋唄の歌詞には浄瑠璃の歌詞も多く含まれています。「数番唄」には「一の谷」や「お七可愛いや鈴ヶ森」とか、万歳の歌詞も登場します。「一の谷」は浄瑠璃の「一谷嫩軍記」(1751初演)から、お七は「恋娘昔八丈」(1775初演)からの引用です。万歳は、『人倫訓蒙図彙』(1690)などにすでに描かれていますので、これらの浄瑠璃が関西ではやり、それが越後まで伝えられたことを考えれば、17世紀半ばには酒屋唄が盛んに歌われていたのでしょう。酒屋唄の始まりが何時からかはまだ分かっていませんが、歌詞を調べることで分かってくるのではないかと考えています。

3. 酒屋唄の種類

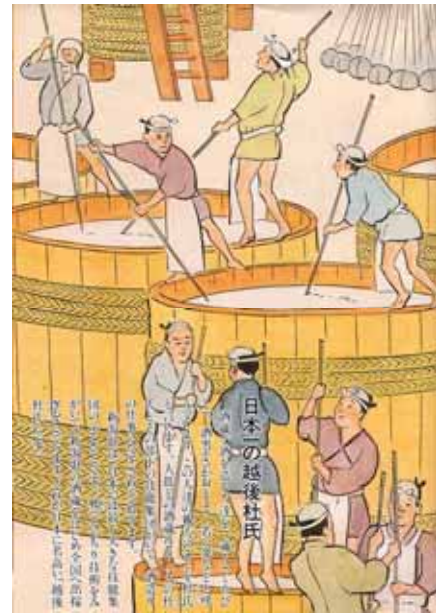
全国各地に酒屋唄は残っていますが、関西の丹波杜氏、東北の南部杜氏、そして越後杜氏が有名です。杜氏とは蔵の酒造の最高責任者を意味し、階層ごとに蔵人の役職による呼称があります。丹波杜氏の唄と越後杜氏の唄はかなり共通部分がありますが、南部杜氏の酒屋唄の歌詞はかなり独特です。

丹波では「ヤットコセー ヨーイヤナ」の囃子言葉で有名な「伊勢音頭」が酒屋唄の歌詞に影響しているというのですが、越後に関してはあまり影響は見られません。

越後の酒屋唄の場合は、大きく2つの音楽的様式に分かれます。寺泊を中心とする漁師たちが酒造業で歌った様式、頸城地域・三島郡周辺の農業に従事していた蔵人が歌った酒屋唄の様式の2種類です。後者は、関東流、朝日流などとさらに細分化されています。この違いは、旋律の違い、曲目の種類や呼称の違い、作業の動作の違いなどに現れています。

現在、越後の酒屋唄には、1日の流れの中で「総起」「流し唄」「桶洗い唄」「数番唄」「米洗い唄」「酏すり唄」「二番權」「仕込み權」「三コロ」「切り火」など約11種類があります。しかし、過去にはより多くの曲があったと思われます。作業工程での唄の役割は次のようになります。

- (1) 仕事の精度を高める：桶洗い唄、流し唄など個人で歌う唄。
- (2) 計時機能：酏すり唄、米洗い唄、仕込み權、二番權、三コロなど、集団で歌う唄。
- (3) 計量機能：数番唄など、個人で担当するかけ声。
- (4) 動作の一致：酏すり唄、米洗い唄、仕込み權、二番權、三コロなど、集団で歌う唄。
- (5) 祈りのための声：切り火(祝詞のような様式)



4. 唄半給金～酒屋唄を歌う目的～

酒屋唄が歌われてきた主な目的には次の10種類があります。

動作をあわせる

酒の酏(もと)などを權棒(かいぼう)で攪拌する時や、米をとぐ時などに、他の人との動作やテンポを合わせるために歌う。

仕事の精度を高める

桶を洗うときなど、歌うことによって力が入り、仕事の精度が増す。

量を量る

水やお湯、蒸米などの量を数えるときに、何杯入れたか記憶するために数を読み込んで唱える。

時間を計る

攪拌の時間を計るために、東海道や中山道などの土地名を歌詞に入れて歌い、時間を計る。歌で時間を計る考えは、日本だけではなく世界の伝統音楽の中にもある。

勤務状態のチェック機能

蔵の経営者や蔵人の長である杜氏が、蔵人たちがしっかりと働いているかどうかを、歌う声を聞いて把握するため。

安全祈願

「切り火」(きりび)と呼ばれる祝詞(のりと)様式の唄えごとでは、火打ち石を打ちながら、酒の神の松尾神社などに祈りを捧げて安全祈願をする。

眠気を取り払う

繰り返しの労働であることと、早朝から深夜までの、時間を選ばない作業のため、眠くならないために歌う。

寒さを凌ぐ・寂しさを紛らわせる。

冬期のつらい出稼ぎの作業の中で、作業のつらさや家族と離れた寂しさを紛らわすために歌う。

共同体の確認

酒屋唄は、蔵人という、日本の伝統的な味覚を育ててきた誇り高い技術者の共同体に伝承する唄であり、新酒が出来たとき(甑倒し)の祝いの時などに、歌われる。

娯楽機能

蔵人が集まる場所では、いつも酒屋唄が歌われる。もっとも良く登場するのは桶洗い唄である。それぞれの蔵人が自分の節やリズムで自由に歌うことができる、自分らしい唄が桶洗い唄だからだ。



プログラム制作・執筆：茂手木潔子
(Motegi Kiyoko)